

ウェブ社会における Google の成長と発展

06L4392 山田綾香

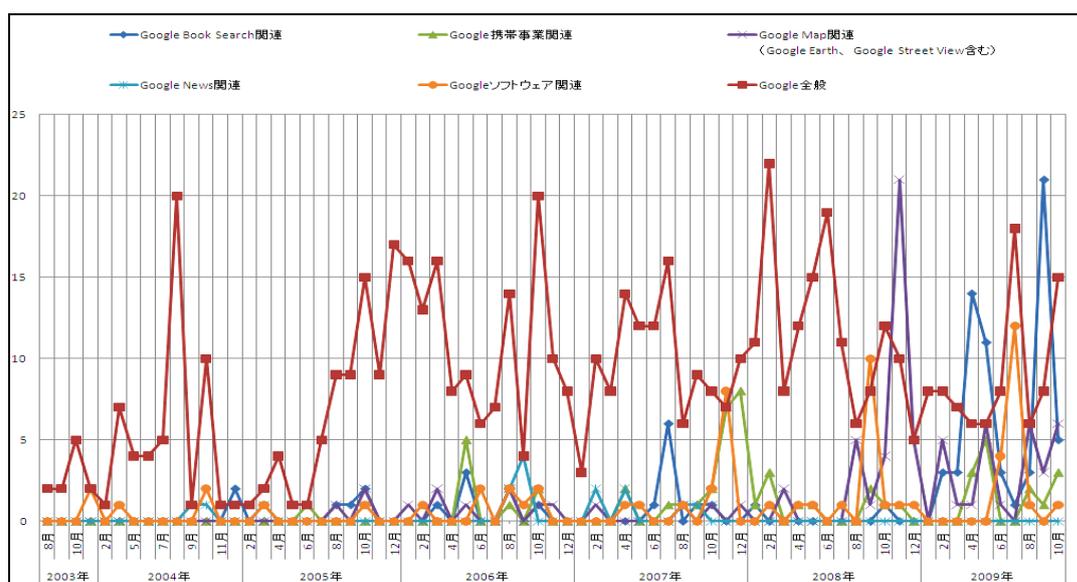
1. Google について

Google はスタンフォード大学コンピュータサイエンス学科の研究プロジェクトとして誕生した後、個人投資家からの出資を受けたラリー・ページとサーゲイ・ブリンが 1998 年に会社として起業した。そのミッションは「世界中の情報を組織化し、世界中からアクセスでき、有益なものにする」である。現在世界の検索エンジンのトップシェアを持つ。Google の主たる収益源はアドワーズ、アドセンスなどの広告であるが、最近では携帯電話やクラウド・コンピューティングに進出している。

2. Google の主なサービス

- ①G-mail…無料メールサービス
- ②Google Map…無料地図サービス
- ③Google Earth…世界中の衛星写真提供サービス
- ④Google Street View…カメラで撮影した町並み画像を閲覧できるサービス
- ⑤Google News…様々なニュース媒体から記事を一括表示するサービス
- ⑥Google Book Search…書籍検索サービス
- ⑦ソフトウェア提供…パソコン向け OS や携帯電話向け OS の提供

3. 新聞記事数調査



●初期

2004年8月に Google がナスダック上場に伴い、経済新聞を中心に記事数が増加。

●2006年

5月18日に KDDI との提携を発表したことにより携帯事業関連の記事数が伸びる。

●2007年

Google Book Search 日本語版が提供開始、さらに慶應義塾大学とのパートナーシップの発表で注目を集める。また携帯向け OS 「Android」 の発表も話題。

●2008年

Google Map による個人情報流出事件発生。

●2009年

2月に Google Book Search 和解の法廷通知が掲載。7月にパソコン向け OS への参入を発表。Windows7 発売の影響もあり、Google の新事業が話題を呼んだ。

4. Google Book Search について

Google Book Search とは 2005 年に Google が開始した、書籍の電子化プロジェクトで、大学や公共図書館の蔵書をスキャンして電子化、OCR にかけて検索提供するものである。2006 年に米国作家協会と米国出版社協会に著作権侵害として告訴されたが、2008 年 10 月に和解し、その結果有料での提供の道が開かれた。しかし日本の書籍も電子提供されることがわかり、作家が抗議するなど紛糾した。現在修正された和解案が提出されている。

この問題に関する主な意見は次のとおり。

- ・民間企業による書籍の宇宙の独占に懸念（宮部信明、野口悠紀雄）
- ・米国外の著作権者に不利益（福井健策）、他国の著作権への配慮がない（日本文藝家協会）
- ・わが国の出版活動に直接の影響はない、この際独自にビジネスを考えるべき（時実象一）
- ・電子化のメリットは大きい、第三者に勝手にやられるのは問題（樋口清一）

5. 考察

【Google Book Search 議論の行方】

Google Book Search に関する議論は継続中であり、今後より一層活発化することが予想される。図書館や出版社の枠を超えた議論が必要不可欠である。一方で Google Book Search の登場が日本に書籍のデジタル化の必要性を提示したのも事実である。

【Google のサービスとミッション】

Google のサービスはそのミッションの上に成り立っており、ほぼ無料で提供されている。しかし Google はあくまで利潤を追求する企業であるため、無料サービスの裏には有料広告が存在する。Google から情報を得ると同時に Google に情報を提供していることを忘れてはならない。